

帰郷ノート

Aimé Césaire

平凡社

エメ・セゼール 著
砂野幸稔 訳



Cahier d'un retour au pays natal/Discours sur le colonialisme

植民地主義論

わがネグリチュードは鐘楼でも伽藍でもない
それは地の赤い肉に根を下ろす
それは天の熱い肉に根を下ろす
それはまっすくな忍耐で不透明の意気消沈を穿つ。

中央人文 ☎262-0050

横浜市立図書館



2009428375

目
次

Aimé Césaire

Cahier d'un retour au pays natal, 1939

Discours sur le colonialisme, 1955

© la Société nouvelle présence africaine, Paris

This book is published in Japan by arrangement with la Société nouvelle
présence africaine,

though le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

Japanese edition © Heibonsha Ltd., Publishers, 1997

序 偉大なる黒人詩人——アンドレ・ブルトン 5

帰郷ノート 19

植民地主義論 119

エメ・セゼール小論——砂野幸稔 189

訳者あとがき 263

序 偉大なる黒人詩人——アンドレ・ブルトン

一九四一年四月。船の残骸がひとつ、視界をさえぎっていた。海辺で珊瑚に閉じ込められ、波に洗われるその残骸は、少なくとも小さな子供たちにとっては、日がな一日はしゃぎ回るのに願ってもない場所だ。だが、波に揺らぎずらしいその姿は、銃剣に挟まれ歩き回ることさえまならないからだ。さしにはなんの慰めにもならなかった。フォール・ド・フランスの錨泊地、ラザレ収容所のことだ。¹⁾ 数日後、ようやく解放されると、私はむさぼるように、ありとあらゆる未知の光景を求めて街角に飛び出していた。

目眩めく市場の喧噪、ハチドリのような声、世界旅行から戻ったばかりのポール・エリユール²⁾が、私に、世界中のどの女たちよりも美しいと言っていた、島の女たち。しかし、まもなく、一隻の難破船の姿が、再び視界をすべて覆い尽くしてしまおうとするかのように現れてきた。この町そのものが漂流し、あたかも自らの内臓を喪失した者のようだった。ショーウィンドウの並ぶ商店街は、なにか思弁的で不安な印象を与えていた。動きは少し緩慢にすぎ、物音は、打ち上げられた漂流物に反響しているかのよう、あまりに澄んでいた。そよ風のうちに、遠く、響き続ける警鐘。

私が、たまたま娘のリボンを買った際に、リボンを売っていた小間物屋の棚に置かれていた一冊の雑誌

を拾い読みしたのは、こうした中でのことだった。簡素きわまりない装丁のその雑誌は、フォール・ド・フランスで発行されたばかりの『熱帯』^{トピック}という雑誌の第一号だった。言うまでもなく、一年来、思想の墮落がどこまで進んだかをつぶさに見、また、マルティニックの警察に独特の情容赦のないやり方を経験した後であったので、私は極度の偏見を抱いてこの文集を開いたのだ……。私はわが目を疑った。なんと、そこで言われていたことは、まさしく言わねばならないことだった。しかもそれは、言いえる最良のことであるばかりか、この上ない高適さで言われていたのだ！ 私に洗面を見せていたあの黒い影どもはすべて引き裂かれ、四散していった。すべての嘘、すべての愚劣なものがずたずたになった。人間の声は押し潰されることも押し殺されることもなく、ここに、まさに光の穂のように昂然と上げられていたのである。エメ・セゼール。それが語り手の名だった。

即座にいくらか誇らしい思いを抱いたことを私は否定しない。彼の言葉は私には親しいものだった。言及されている詩人や作家の名前だけでも、私にとつては確かな保証人だったが、何よりも語られている言葉が欺くことのない人のそれであった。それは、ひとりの男が自らの企てに全身全霊を注ぎ込んでいるということ、そして同時に、芸術的な観点からだけでなく倫理的・社会的な観点からも、自らの発言を裏づける力量、いやそればかりか、それを必然的で不可避のものとしてしまふ力量を、彼が完全に備えているということを示していた。彼の文章と並んで収められている文章は、明らかに彼と同じ方向を目指す人々のものであり、彼らの思想は彼の思想と一体となって重なり合っていた。それに先立つ数カ月間にフランスで出版された、マゾヒズム、さらには奴隷根性をあらわにした出版物とは明確な対照を成して、

『熱帯』^{トピック}は王道を建設し続けていた。セゼールは宣言する、「われわれは闇に対して否^シと言う者たちである」と。

彼が示し、その友人たちが認知を助けてくれたその大地こそ、まさしく私の大地でもあった。私が闇に呑み込まれていくのではないかとあらぬ恐れを抱いた、われわれの大地だったのである。読む者には彼の高揚が肌に伝わってくる。そして、まだ彼の意図するところを十全に理解することすらできぬうちに、なんと言おうか、もっとも簡素な言葉からもっとも稀有な表現に到るまで、彼の口を通して語られる言葉がすべて赤裸の言葉であることに気づかされるのである。それこそがセゼールにおける、大詩人を群小詩人から明確に分かつ、具体性の極致、語調の常に変わらぬ雄大さの源である。その日私が知ったことは、この動乱のさなかにおいても、言葉の音律はいささかも狂っていないかつたということだった。つまり世界は破滅の縁にあるのではなかつたのだ。世界は意識を回復するだろう。

そのマルティニックの小間物屋は、まもなく、こうした幸運なときにつきものの嬉しい偶然から、セゼールとともに『熱帯』^{トピック}の中心人物であるルネ・メニル³の妹であることがわかった。彼女の仲介で、私がかウンターの上で急いで書きなぐった数語の書付は、最小限の時間で届けられるはずだった。実際、一時間も経たないうちに、彼女は町をうろついていた私を捜し出し、私を待つとの兄からの伝言を伝えてくれた。メニル、徹底した謙虚さに隠された深い学殖、完璧に保たれた節度、しかしそれにもかかわらず、溢れる精気と沸き立つ精神の波動が伝わってくる。

そしてその翌日、セゼール。彼のあまりのまじり気なしの黒さに気づいたときの、自分の素朴な驚きを

いまでも覚えていて。彼の微笑みのゆえに、その黒さは最初は目に入らないのだ。彼を一目見て、私にはすでにわかっている。私には見えている。そしてその後すべてがそれを確認することになる。そこにいるのは、激しく沸き上がる発酵の頂点に達した生きた醸造桶なのだ。そこでは、これもまた最高水準の知識が、不思議な天賦の才と融け合っている。私にとって、独自の自己を示すセゼールの出現——そのことだけを言っているのではない——は、時の徴としての意味を帯びる。すなわち、精神の屈従が習いとなり、死の勝利の成就のため以外には何ひとつ生み出されることもなく、芸術までもがいまにも陳腐な様式のまま硬直化してしまおうとするこの時代にただひとり立ち向かう、最初の清新な息吹、起死回生の、全き自信を回復させてくれる最初の息吹は、ひとりの黒人によってもたらされたのである。今日ただひとりの白人も成しえないような仕方でフランス語を操るこの男は、ひとりの黒人なのだ。われわれをして火花の上を前進させるような接触を、少しずつ、あたかも戯れるようにして作り出しながら、われわれを未踏の地平へと導くこの男は、ひとりの黒人なのだ。そしてこの黒人は、単にひとりの黒人であるだけでなく、全人類を体現し、人類のあらゆる問い、あらゆる苦悩、あらゆる希望、あらゆる喜びを表現する、人間の尊厳の模範として、いよいよ私を捉えて放さない。

夕方、外からの光がクリスタルの塊となるバーで、リセでの授業——当時ランボーの作品を取り上げていた——を終えたセゼールと重ねた対話、パンチの炎のように美しいシュザンヌ・セゼールの存在によってとりわけ魅惑的なものとなった彼の自宅のテラスでの会合、そして何よりも、島の奥深くへの遠足。われわれがアブサロンの目も眩む奈落に身を乗り出したときのこと、いつまでも忘れないだろう。それは、

世界を揺り動かす力をもつに到った詩的イメージが生成奔出する坩堝そのものだった。乱舞する植物の渦の中で、一本の槍の穂先で喘ぐ三重の心臓、カンナの謎めいた巨大な花がただひとつの目印だった。そのとき、その花に導かれるように、われわれの時代が人間に課した使命、人間を自らの存在にもはや耐えられぬほどまでに追いつめた思考と感覚の様式をいま荒々しく断ち切らねばならぬという使命が、まさに厳として私に示されたのだった。断然私は確信した。ある種のタブーが除かれないう限り、つまり、彼岸への信仰——、ますます腑抜けたものとなりつつあるが——、不条理にも民族、人種と結びつけられた集団意識、そして金の権力という汚辱のきわみ、こうしたものが流し続ける死の毒素を人間の血脈から除去することができない限り、何ひとつ成しえないであろうと。われわれを窒息させるこの枠組を突き崩す役割が、一世紀来詩人たちに与えられてきたということは争いがたく、しかも多くの場合、後世がその責務をもつとも徹底して果たした者たちのみを聖別するということは特記すべきであろう。

その日の午後、すべての堰が切られ、絢爛とほとばしり出る緑を眼前にして、私は、彼らのひとりとかくも親密な一体感を感じられるということ、そしてその人物が誰にもまして意志の人であることを知り、さらにその意志と私の意志が本質において一如であることの至福を味わった。

そしてまた、彼が完璧な成果をもたらす存在であることの十分な証拠を私は手にしていた。その数日前、セゼールは私に彼の「帰郷ノート」を贈ってくれていた。パリの一雑誌からの薄い抜刷だったが、一九三九年にはこの詩はパリでは注目されることなく終わっただろう。しかし、この詩は、紛うかたなくこの時代の最高の詩的記念碑であった。それは私に至高の確信をもたらしてくれた。自らひとりではけっして

到達しえないような確信である。その著者は、私が正しいと考えていたことすべてに賭け、そして歴然と賭けに勝っていた。賭金は、セゼール固有の天才を別にすれば、われわれに共通の生についての見解だった。

そして、まずそこに見出されるのは、とりわけ豊饒な運動であり、激しく奔出する熱氣、情動世界をたえまなく徹底的に揺り動かし、ついには転倒させてしまうほどの力である。それこそ真の詩の証しであり、真の詩の周囲に常にはびこる毒草のような偽りの詩、見せかけの詩と真の詩を分かつものである。歌うべきか歌わざるべきか。それが問題であり、歌わざる者には詩の中にかなる救済もありえないだろう。詩人には歌う以上のことを求めねばならないにしてもだ。そして私が言うまでもなく、歌わぬ者たちが脚韻や韻律構成などといったがらくたをいくらかき集めても、それはミダス王⁽⁵⁾の耳を欺きえるのみであらう。エメ・セゼールは何よりもまず歌う者である。

絶対的な必要条件ではあるが十分条件ではないこの条件を満たした上で、詩の名に値する詩は、それが前提とする禁欲の、拒否の度合いによってその価値を測られるのであり、その本性のもつ否定的側面は、詩の本質的要素と看做されねばならない。詩は、すでに人が見、聴き、合意したかもしれないかなることとも見過ごすことを忌み嫌い、以前の使われ方を逸脱するのでない限り、すでに使われたものを使うことを忌み嫌う。セゼールはその意味でもっとも気難しい詩人である。そしてそれは彼が誠実そのものであるからだけでなく、彼の知識の該博であること、彼が事物に深くかつ広く通じていることのゆえなのである。つまるところ——「傾向」詩ではないとしても「テーマ」詩であるという「帰郷ノート」の例外性に起

因するあらゆる曖昧さを断ち切るために、私はここで、この詩に続いた別種の詩についても語っていると、いうことを明確にしておく——すべての偉大な詩、偉大な芸術と同しく、セゼールの詩のもっとも高い価値は、それが行う錬金術的変成の力にある。それはもっとも忌み嫌われる材料——その中には醜悪さや隷従までも数えねばならない——から、もはや言うまでもなく金でも賢者の石でもなく、自由を生み出すのである。^(原註)

天賦の詩才、拒否の能力、いま述べた特異な錬金術的変成の力、こうしたものを一定数の技法上の秘訣にまとめてしまおうなどと望むのは、あまりにも愚かしいことであろう。それについて謬たず言える唯一のことは、この三つの才能すべてがその最大公約数として、生の情景を前にした情動の並外れた激しさ（そしてそれは生を変えるために生に対して働きかけようとする衝動をもたらす）を内包し、しかもそれは当面還元不能であり続けるということである。せいぜい批評に許されていることは、著者の人格形成の中の強烈なコントラストを説明し、その形成過程の特筆すべき状況を明るみに出すことである。セゼールに関しては、それを通してわれわれは、これを限りに、勇躍無関心から踏み出すことになるということを認めねばならない。

「帰郷ノート」は、その意味で比類のない、かけがえない資料である。ひどく地味なその標題は、それだけでも著者をもっとも鋭く苛むものであるはずの軋轢、その乗り越えが彼にとって死活問題である軋轢のただなかへとわれわれを導く。というのも、この詩を、彼はバリで書いたのだ。高等師範学校を卒業し、マルティニックに戻ろうとしていたときのことである。生まれ故郷、そうとも、とりわけこの島の呼

的・政治的《人種差別》にこそ終止符を打たなければならぬ^(原註3)。われわれはまた、こうした植民地の外でも、有色人種諸民族の圧倒的多数が侮辱的なかたちで疎んじられ、よくしても下級の職種に閉じ込められている状況が断ち切られる日を、同じ焦慮に駆られて待ち望んでいる。もしこの期待が、現在行われている戦争の終結後に実行されるであろう国際的な合意によって裏切られることになるならば、有色人種諸民族の解放は、ほかならぬ彼ら自身の手によって成し遂げられるものでしかありえないという立場に、そのことが含意するすべての結果をあらかじめ引き受けた上で、決然と与^与するほかないであろう。

しかし、それがいかに根本的な問題と見えようと、彼の要求のこの直接的側面のみを語ることで満足するならば、それはセゼールの発言の意味を許しがたく狭く限定してしまうことになるだろう。思うに、この要求にはかり知れない価値を与えているのは、それが、ひとりの黒人にとっては現代世界の黒人一般の運命と切り離しえないものである苦悶を、いついかなるときも超越し続けているということであり、そして、あらゆる詩人、あらゆる芸術家、その名に値するあらゆる思想家の要求ともはや一体となり、しかなおかつ独自の言語的天才をそこに加えながら、現代社会がより全般的な意味で人間に課す条件の、容認しがたい、しかし同時に無限に修正可能なあらゆる様相を全面的に包摂しているということである。そしてここに大活字で書き込まれるのが、超現実主義^{シュルレアリスム}が常にその綱領の第一条に掲げてきたことである。すなわち、「理性」を僭称するまでの無分別のきわみに達したいわゆる「良識」にとどめを刺すという断固たる意志、そして、あの致命的な人間精神の分裂——一方が他方を切り捨て自らに全能の地位を与え、他方を抑圧しようとしたがゆえに結局は他方を激せしめずにはいられない——にただちに片をつける必要

び声にどうしてあらがうことができようか。その空の、蠱惑的な波のうねりの、甘くささやくようなその言葉の誘惑に、どうして屈せずいられようか。しかし、まもなく陰が覆う。この郷愁を何がずたずたにするのか、それを理解するにはセゼールの立場に身を置くだけでよい。このさえずりの背後には、植民地住民の悲惨が、ひと握りの寄生者たち——彼らは自らが属する国の法をさえ無視し、自らの国の不名誉となることにもなんの痛みを感じることもない——による厚顔無恥の搾取があり、そして海上に飛び飛びに散らばるといふ地理的な不利を抱えたこの人々の諦めがある。さらにその背後には、ほんの数世代の隔たりに置いて奴隷制があり、ここでその傷は再び開いている。その傷は失われたアフリカ^(原註2)の大きさいっぱいに開き、祖先が忍んできたおぞましい扱いの記憶の、集団全体が犠牲となったすさまじい不正義、もはや修復不能の不正義の記憶の大きさいっぱいに開いている。出発しようとしているこの男——白人たちが教ええたことはすべて我がものとし、そしていま、そのゆえにこそいつそう激しく心を引き裂かれている——が、身も心も帰属しているのがその集団なのだ。

『ノート』において、戦闘的要求が苦渋と、ときには絶望と競い合うのは当然であり、著者が繰り返し、劇的きわまりない自己への回帰に身を曝すのもまた当然である。その要求は、これ以上正当な要求はないと何度指摘しても足りない、そのような要求であり、法だけを考えても白人はその実現に心を砕くべきであろう。しかし、現実あまりにもかけ離れている。確かに人々はこの要求をおおずと日程に上げ始めてはいるが、「古い植民地は新しい体制の下に置かれるべきであり、その自由への前進は国際的な問題となっていくであろうが、そこでは民主主義が、有色人種に対する搾取のみならず、白人による社会

である。奴隷商人どもはこの世界の表舞台から肉体としては姿を消したが、精神の中では彼らは疑いなく逆に大手を振つてのさばっている。この奴隷商人たちの「黒檀の木」はわれわれの夢であり、われわれの本性の奪い去られた過半であり、大急ぎで積み込まれ、相変わず船底に放り込んで腐るにまかせられるあの積荷なのである。「われわれはお前たちとお前たちの理性を憎んでいるのだから、われわれは早発性痴呆を炎上性狂気を靱性食人癖を援用する……ぼくに満足したまえ。ぼくはお前たちに満足しはしない」。そして突然、もはや偽りのものではない贖罪を約束するような、世界を変貌させるこの眼差し、燦を覆う青い綿毛。セゼールと私が来たるべき時の偉大なる予言者と看做す者、そうだ、イジドール・デユカス、ロートレアモン伯爵の姿が現れたのだ。「ロートレアモンの詩、収容命令のように美しい……」。彼は叙情的で青ざめた唇を成して積み重ねる——夕暮れの壞疽の中に熱帯梨の指が落ちるように——階層化された宇宙の驚異の玉座へと人間を——足も手も臍も——祭り上げる、噴飯物の哲学の死のトランペットを——天の喉に打ちつける裸の拳の怒号……。詩は、盲目の大タムタムの中への、理解不能の星々の雨に到るまでの、過剰、極端、禁忌的的確な探索に始まるということをも最初に理解した者……」

エメ・セゼールの言葉、生まれ出ずる酸素のように美しい。

アンドレ・ブルトン
ニューヨーク 一九四三年

原註

(1) 「フランス文芸」(第七十八号、一九四三年二月)に掲載された、まったく正反対の立場を採る次の声明を私は予期していなかった。「私は詩を、散文に課せられた制約に従うだけではなく、さらに諧調、律動、音の定期的な反復などといった詩に特有の制約に従いながら、なおかつ散文を超える力をもたねばならない。エクリチュールであると考えている。それゆえ私は詩に、散文に求められるすべての資質、なにかんずく飾り気のなさ、正確さ、明晰さを求める。詩人は自らが欲するものをすべて、そしてそれだけ表現しなければならぬ。その極限においては、言い表しえぬもの、暗示、連想を呼び起こすイマジユ、神秘などといったものはいつさい存在しない……」等々。ロジェ・カイヨワは多くの場合はるかに優れた靈感を示すが、ここではまったくの俗物として語っている。

(2) レオ・フロベニウスは、中世末期のヨーロッパ航海者たちの記録を引いて次のように書いている。「ギニア湾に到達し、ヴァイダに上陸した船長たちは、よく整備され、数里にわたって両側に並木が配された道路を目にして驚いた。彼らは何日もその布は彼ら自身が織ったものだった！ さらに南に行き、コンゴ王国に到ると、ひしめき合う群衆は絹やビロードの衣服を身にまとい、広大な国々はすみずみに到るまでよく治められ、君主たちは強大で、さまざまな産業が栄えている。彼らは骨の髄まで文明化されていた！」(「熱帯」第五号、一九四二年四月の引用より)

(3) ビエール・コット「民主主義憲法の諸類型」(「自由世界」第二号、一九四三年二月)

(4) エメ・セゼール「イジドール・デユカス、ロートレアモン伯爵」(「熱帯」第六十七号、一九四三年二月)

- ④七七頁一五行目「ハチドリよ、来い」―七九頁一五行目「それを女の震える腹が鉱石のように孕む」
- ⑤九二頁六行目「さて、ぼくは十分へりくだっているだろうか?」―九五頁一行目「ぼくは受け入れる」
- ⑥一〇五頁八行目「がんがんと聲をわたる正午の海から」―一〇七頁五行目「宿命の三角形の静寂よ」
- [44] Aimé Césaire, "Présentation", *Tropiques* No. 1, avril 1941, pp. 5-6, reproduction Jean-Michel Place, 1978.
- [45] セゼール「帰郷ノート」、本書四八頁。
- [46] "Entretien avec Aimé Césaire par Jacqueline Leiner," in *Tropiques*, op. cit., p. v. ジェールダン氏はモリエールの「町人貴族」の主人公。言葉は散文と詩に分類されると教わり、自分がそれと知らずに実は散文を作っていたのだと感動する。
- [47] *ibid.*, p. vi.
- [48] Aimé Césaire, "L'homme de culture et ses responsabilités" (2e Congrès International des Ecrivains et Artistes noirs-Rome, 1959), in *Premiers jalons pour une politique de la culture*, Présence Africaine, 1968, pp. 36-42.
- [49] Aimé Césaire, *Lettre à Maurice Thorez*, 1956, Présence Africaine, pp. 8-9.
- [50] Cité par Raphaël Confiant, op. cit., p. 159.
- [51] Cité par George Ngai, op. cit., p. 235.
- [52] Cité par Roger Toumson, Simone Henry-Valmore, *Aimé Césaire-Le nègre inconsolé*, 1993, Ed. Syros, p. 112.
- [53] Cité par George Ngai, op. cit., pp. 238-239.
- [54] Aimé Césaire, *Lettre à Maurice Thorez*, op. cit., pp. 10-11.
- [55] Cité par Roger Toumson, Simone Henry-Valmore, op. cit., p. 163.
- [56] "Entretien avec Césaire" in L. Kesteloot, B. Korchy, op. cit.
- [57] Aimé Césaire, "L'homme de culture et ses responsabilités", op. cit.
- [58] Aimé Césaire, *moi, laminaire...*, 1982, Seuil, p. 9
- [59] Patrick Chamiseau, *TEXACO*, 1992, Gallimard, p. 274.

訳者あとがき

本書は仏領マルティニックの黒人詩人エメ・セゼールの代表作である『帰郷ノート』(Cahier d'un retour au pays natal)と『植民地主義論』(Discours sur le colonialisme)、およびアンドレ・ブルトンによる『帰郷ノート』への序文「偉大なる黒人詩人」(André Breton, *Un grand poète noir*)の翻訳である。それに訳者によるエメ・セゼールについての小論を付した。

エメ・セゼールの名とその言葉が最初に日本語読者の目に触れたのは、おそらく、一九六〇年代に刊行された人文書院のサルトル全集のなかのことだっただろう。「黒いオルフェ」(鈴木道彦・海老坂武訳「サルトル全集第一〇巻 シチュアシオンⅢ」所収、人文書院、一九六四年)は、サンゴールによって編集され、一九四八年に出版された『ニグロ・マダガスカル新詞華集』の序文として書かれた文章だが、このサルトルの文章はすでに、セゼールをはじめとする黒人詩人たちの肺腑を別る言葉を正面から受けとめる類い希な

名文だった。そして一九七〇年に出版されたフランツ・ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』（海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房）は、今度は同じマルティニック人ファノンの言葉を通して、彼が身を没しようとしたセゼールのネグリチュードを、激しく、生々しく伝えていた。

しかし、この頃の大方の読者が受け取ったものは、セゼールの上げた「ニグロの叫び」そのものであるよりは、むしろサルトルのアンガージュマンの思想の遠景としての植民地問題であり、あるいはサルトルを通じて輸入されたフランスの第三世界主義だったのではないだろうか。

それからおよそ四半世紀を経て、今度は「クレオール」という言葉とともに再びセゼールの名が引かれるようになった。今福龍太氏の『クレオール主義』（青土社）、パトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアンの『クレオールとは何か』（西谷修訳、平凡社）が、セゼールの名を日本語世界のなかに、「クレオール」という異なった装いのもとに再び登場させた。

セゼールと同じマルティニック人であるシャモワゾー、コンフィアンら「クレオリテ」という「新しい」思想の息吹の鼓吹者たちは、セゼールの「裏切り」に激しい怒りを隠さなかったファノンとは異なり、セゼールの「限界」をほとんど残酷なまでの平静さで見据えている。自ら「セゼールの息子」を名乗る彼らは、あたかも彼らの「過去」のなかに名譽ある位置をあてがうことでセゼールに対する「父殺し」を完了させたかのようだ。

確かに『帰郷ノート』の決定版が出版されてからでもすでに四〇年が過ぎてている。セゼールが『帰郷ノート』を書き始めたのは六〇年も前のことである。

しかし、北アメリカから南アフリカまで全世界の黒人、非黒人の魂を揺さぶり続けたセゼールの言葉は、サルトルあるいはファノンに付随するひとつの興味深いエピソードにとどまることも、「クレオリテ」の主唱者たちによる過去への栄誉ある埋葬も許さない重みと豊かさを持ち続けている。

いくつかの引用によってひとつの歴史上の位置をあてがわれてしまうことも、過去の栄光として祭り上げられてしまうことも受け入れないセゼール自身の言葉に、できるだけ多くの日本語読者に直接あてられていたい、というのが本書の翻訳の動機である。

二〇年近く前、一行を読むのには数時間をかけながら読み訳した『帰郷ノート』の日本語訳が本書の原型となっている。以来、読み直すたびに訳文を練り直してきたが、セゼールの奔流のようなフランス語原文を忠実に再現するだけの日本語表現力を、残念ながら訳者はいかに持ちえなかった。それにもかかわらず、訳文を通じて幾分かでもセゼールの言葉の力を感じていただくことができれば幸いである。

『帰郷ノート』のテキストについては、決定版とされる一九五六年の版以降もいくつかの語句と詩節の区切りについて異同が見られるため、本書では最新の版であるスイユ社の全詩集（Aimé Césaire, *La Poésie, Editions du Seuil, 1994*）に基づきながら、詩節の区切りについてはナイジェリア人研究者アビオラ・イレレによる『帰郷ノート』にのっとる詳細な研究（Abiola Irele, *Aimé Césaire, Cahier d'un retour au pays natal, New Horn Press, Ibadan, 1994*）に従った。

ブルトンの『偉大なる黒人詩人』は、一九四七年に『帰郷ノート』がニューヨークのプレランターノ社と

パリのボルダス社からはほぼ同時に出版された際に序文として付されたものである。このブルトンの文章は後に『マルティニック、蛇を魅了する島』(André Breton, *Martinique, charmeuse de serpent*, Ed. Jean-Jacques Pauvert, 1972) にまとめて収録されたが、『婦郷ノート』の後の版、とくにもっとも親しまれた一九七一年および八三年のプレザンス・アフリケーヌ社版でも、あたかも『婦郷ノート』と一体をなすかのように続けて収録されており、本書でもその形を踏襲した。

『植民地主義論』については一九五五年の改訂増補版を用いた。

本書の翻訳の過程では多くの方々にお世話になった。この場を借りてお礼を申し述べたい。ダカール大学のリリアン・ケステロート教授にはセゼール研究の過程で私淑し、後に知遇を得て翻訳についても相談に乗っていただいた。日本在住のマルティニック人研究者ガブリエル・アンティオップ氏、パリ在住のコンゴ人研究者ラファエル・サフリー氏にはセゼールのネオロジスムや難解語の解釈について示唆をいただいた。また、仏文学者木下誠氏には訳者が長年温めていた『婦郷ノート』の翻訳の出版のために平凡社への仲介の労をとっていただいた。

『婦郷ノート』、『植民地主義論』については海老坂武氏、加藤晴久氏の手になる優れた部分訳があり、今回の翻訳のために参考にさせていただいた。セゼールの訳文自体に限らず、優れた先達の仕事には教えられることが多かった。

最後になったが、平凡社編集部の二宮隆洋氏、松下幸子氏には草稿の段階から訳文を丁寧にチェックし

ていただき、多くの貴重なご意見を頂戴した。遺漏の多かった草稿が曲がりなりにも形をなすことができただのは両氏のおかげである。

砂野幸稔

帰郷ノート／植民地主義論

1997年1月6日初版第1刷発行

著者 エメ・セゼール
訳者 砂野幸稔
装丁者 戸田ツトム＋岡孝治
発行者 下中 弘
発行所 株式会社 平凡社
住所 〒152 東京都目黒区碑文谷5 16 19
電話 03 5721 1251〔編集〕
03 5721 1234〔営業〕
振替 00180 0 29639
印刷 明和印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

ISBN4 582 70223 6

NDC分類番号311 四六判(19.4cm) 総頁数272

乱丁・落丁本のお取替は直接小売読者サービス係までお送りください
(送料は負担いたします)。

著者

エメ・セゼール (Aimé Césaire)

1913年、西インド諸島のフランス領マルティニック島に生まれる。18歳でパリに渡り、高等師範学校に学ぶ。1930年代に黒人の文化的、政治的復権を訴える「ネグリチュード(黒人性)」を主唱し、多くの詩や戯曲を執筆。解放の思想を追求するセゼールの著作はアフリカ、カリブ、北アメリカの黒人知識人に大きな影響を与えた。ネグリチュードにいたる思想発展のドラマを綴った「帰郷ノート」は、ブルトンらシュルレアリストに絶賛されただけでなく、現在も世界中で読み継がれている。フランス国民議会議員、マルティニック島フォール・ド・フランス市長として政治にも携わる。

訳者

砂野幸稔 (すなの ゆきとし)

1954年滋賀県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、熊本県立大学文学部教員。カリブ、アフリカのフランス語文学を研究。共著書に「アフリカ世界」[アフリカ史を学ぶ人のために](ともに世界思想社)、訳書に「ユネスコ・アフリカの歴史」1、4、7巻(共訳、同朋舎出版)、モンゴ・ベティ「ボンバの哀れなキリスト」(現代企画室)ほか。



9784582702231



1910031032965

ISBN4-582-70223-6 C0031 P3296E

平凡社

定価3,296円(本体3,200円)



われわれは歌う、怒り狂う草原に燦然と輝く毒花を、
血栓で遮断された愛の空を、
癩痢病みの朝を、深海の砂の白熱の炎上を、
獣臭さに打ち貫かれた夜の残骸の漂着を。